

後輩たちへのエール！ その18

2020年5月12日

高校時代の全てがいつかヒントになる

◇今回は、フルタジュンさん（劇団フルタ丸代表）のエールです！

関高校生の皆さん、こんにちは。

自分は今、高校を卒業して20年が経ち、38歳です。

今、この状況下で、いったいどんな言葉が皆さんにとってのエールになるだろうかと考えてみたのですが、威勢の良い言葉はなかなか見つかりません。なので、自分の高校時代、進学、現在を紐解いてみながら、何かエールとなるような言葉を探してみたいと思います。

捨てられないファーストミット

僕の部屋に、高校時代に買ってもらった硬式野球のグローブがあります。

ファーストミットです。今でもたまに、このグローブを手にはめてボールを握ったりしています。こんなふうに書くと、野球部時代の輝かしい記憶でも思い出しているのかと思われるかもしれませんが、逆です。20年前のグローブは、今もピカピカで、全く汚れていません。

入学した4月、野球部に入ってみると、1年生は筋トレや素振りといった基礎的なことをやる毎日でした。自分のできる範囲で楽しくそれなりに真剣にはやっていました。けど、ある日、同級生のA君が僕に言うわけです。

「古田くん、そんな素振りじゃ甲子園に行けない」

当時、僕は自分の高校が甲子園に行けるなんてことを考えたことすらありませんでした。正直、「はあ？」という感じでした。けど、練習の度にA君は言う。ただ野球を楽しめればいいのかという、気楽で不埒な気持ちで野球部に入ったんですが、それもだんだん楽しくなくなっていました。7月、3年生が一回戦で敗退が決まった後、僕は野球部を退部することにしました。わずか4カ月間の野球部員でした。野球部の道具一式を親に買ってもらい、それが無駄になってしまったことは申し訳ない気持ちになりましたが、自分の選択に後悔はないと信じていました。その後は、家と学校を往復するだけの毎日です。それなりに

楽しい学校生活ではあったけど、目標や夢が何もない。唯一楽しみだったのは、帰宅してから見る織田裕二が出るテレビドラマの再放送、あとは「ナインティナインのオールナイトニッポン」などの深夜ラジオぐらいでした。

3年生の夏がやってきました。僕らの世代の野球部員にとっては最後の夏でもありました。1回戦か2回戦で負けるだろうとどこかで思っていた。けど、その年はどんどん勝っていくわけです。

「嘘だろ？」

妙に焦り始めた自分がいました。あの時、A君が言っていた「甲子園」というフレーズが寝ても覚めても何度も頭を過ぎるようになります。甲子園に行けるわけがない。いや、行ってくれるな。どこかでそんなふうを考えてしまうような思考に堕ちていきました。自己肯定しなかったんです。自分が間違っていたと思いたくなくて。けど、高校を挙げて野球部を応援する熱が高まって来るばかり。僕は気になりながらも、応援に行く勇気が出ず、岐阜放送のテレビ中継で試合を見ていました。そして、迎えたベスト8。ついに、学校からは数台のバスが出ることになり、長良川球場へ向かう生徒や保護者達で溢れかえっていました。僕は隠れるようにして、そのバスに乗り込みました。この目でどうしても見たかったのです。

対戦相手は関商工。結果から書くと、接戦の末、関高校は敗退。

関高校側の応援席からは惜しめない拍手が沸き上がりました。すると、野球部員たちが一列に並んで、応援席に向かって大声で叫んだ。

「ありがとうございました」

僕は気づくとA君を探していた。見つけて、彼が顔をあげた時、負けた悔しさでぐちゃぐちゃに泣いていたのを見た時、膝から崩れ落ちそうになった。自分は一生懸命になることを避けて、分かったようなつもりになり、誰かが口にした夢を馬鹿にしていたことが情けなくて仕方なくなった。

この一連のことが、僕は今でも忘れられずにいます。
高校生活を通して、最も強く刻まれた記憶かもしれません。

後悔したくない。そして、誰かのどんな夢も決して馬鹿にしたくない。

何かを学ぶ時、それはどんなものからでも良いと思います。
勉強でも、部活でも良いです。先生や友達の言葉でも、YouTubeでも良いです。
僕の場合は自分の失敗から、そんなことにやっと気づけました。
高校生という3年間で、学ぶ対象は無限にあります。何からでも学べます。そして、自分が

主体的になって手に入れた人生訓ほど、その後の人生で頼りになる指針はありません。

好きなものを大事にするということ

一浪の末、上京して明治大学という所に進学しました。

文学部に入り、どういうわけか演劇学というものを選んで学ぶことになります。

東京に出た僕は高校時代のような後悔を二度とするまいと決めて、無駄に活動的になっていきました。ポケットに哲学の文庫本を入れ（読んでない）、不便な下駄なんかを履いたりしつつ（恥ずかしい）、大学の悪友達と自分の劇団を立ち上げました。そういう仲間が大学のクラスに揃っていたことも運が良かったのかもしれませんが。僕は演劇を始めました。

それと並行して、大学の図書館で知った放送作家スクールにも通い始めました。大学2年になった春、色んな縁でTBSラジオの新番組「JUNK さまぁ〜ずの逆にアレだろ?!」という番組に作家として参加することになりました。その番組は、高校時代、浪人時代、上京してからも聴いていた「ナインティナインのオールナイトニッポン」の裏番組。つまり、大好きだった番組が、聴取率で勝たなければいけないライバル番組になった。ココに繋がるのかと思ひ、興奮しました。同時に自分がこれからやりたいこと、やっていくべきことがハッキリした瞬間でもありました。

人生は巡ります。

その時はどこに繋がるのか分からないものが急に何かと繋がったりします。

高校生の間に皆さんが興味を持って「見た・聞いた・話した・経験した・感じた」何かこそ大切にしてほしいと思っています。それは本当に何でも良いのです。

好きなものを大事にするということ。

たったそれだけのことです。けど、実はそれがなかなか難しいのです。

何かに迷ったり、立ち止まった時、答えが見つかるヒントはそこにあると思って下さい。

関高校 100 周年式典イベント

大学卒業後は、在学中に始めた作家の仕事を軸に、脚本家・演出家として現在に至ります。自分の劇団の活動も続けています。東京の下北沢で新作を上演することが多いですが、数年前から故郷である美濃市でも上演するようになりました。

そんな活動を通じて、2021年に100周年を迎える「関高校 100 周年式典イベント」演出のご相談を受けました。これまでになかったような新しい式典イベントにしたいという依頼でした。まさか、こんな日が来るとは思ってもみませんでした。こんな僕が、関高校に初め

て何か恩を返せるかもしれないチャンスを頂けたかもしれない。そう感じました。式典イベントを盛り上げたい、在校生、卒業生が参加して良かったと思えるものになりたい。楽しいものになりたい。動き始めました。

この式典の演出にも繋がる「ある企画」を式典ホームページで始めることにしました。

「皆さんとつくる、関高校 100 年間のタイムライン」という企画です。

100 年間に及ぶ関高校のタイムラインに、皆さんの個人的な思い出を書き込んで頂くというものです。皆さんの思い出やエピソードが 100 年という時をつないでいきます。

ホームページが公開され、少しずつ皆さんのコメントが集まり始めました。とてもワクワクしています。そこでは、在校生である皆さんの知らない時代の関高校を垣間見ることができます。また、卒業生の皆さんが、在校生である皆さんの書き込みで現在の関高校を知ることができるのです。

100 周年の式典イベントは、来年 2021 年の秋に予定されています。

100 年に一度の関高校大同窓会。

皆さんと一体どんな景色を見ることができるのか。

お会いできることを楽しみにしております。

